

藤原宮

大極殿院の調査

飛鳥藤原第186次調査 現地説明会資料
(独) 国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部



発掘調査区全景（南東から）

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、回廊で囲まれた東西約120 m、南北約170 mの区画です。回廊内側(内庭)の中央には、儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、その南方には南門が設けられています。一部の建物については、戦前に日本古文化研究所が発掘調査を実施していますが、奈良文化財研究所都城発掘調査部でも継続的に調査をおこない、主要な建物の配置と構造を明らかにしてきました。今回の調査地は、大極殿院内庭の中央部南側、大極殿の前面にあたります。

これまでの調査で、大極殿院内庭も朝堂院朝庭と同じく礫を敷いて整備されていることがわかっており、また、下層には藤原宮の造営に関わる遺構、上層には藤原宮廃絶後の遺構が存在することが知られています。

今回検出した藤原宮期の遺構には、礫敷広場、大極殿南面階段があります。幢幡遺構などの儀式に関わる遺構は確認できませんでした。

礫敷広場は、拳大の礫を整地土の上に敷いたもので、今回の調査区ではおおむね標高71.2 m前後で検出されていますが、北東側がやや低いことがわかりました。

大極殿南面階段は中央階段と東階段の痕跡を確認しました。凝灰岩切石の底部が見つかり、その幅は1.1 mあります。階段の東西幅は中央階段の内々で5.2 m、階段の出にあたる南北の長さはいずれも3 m以上あります。階段の凝灰岩はいずれも二上山産出の白色角礫凝灰岩ですが、階段の周囲からは兵庫県加

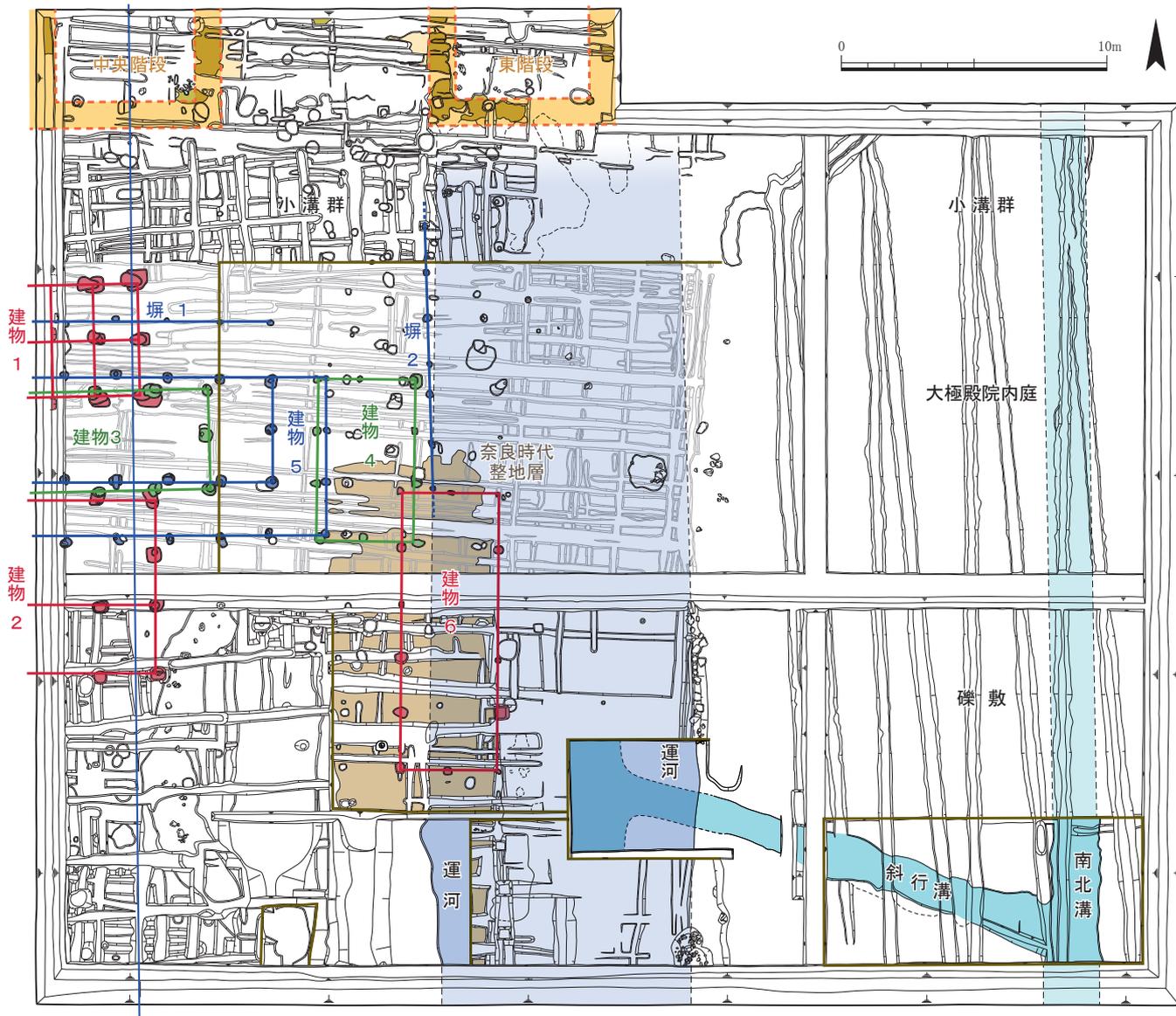
古川西岸産出の流紋岩質溶結凝灰岩(竜山石)も出土しており、基壇の外装石として両者を組み合わせて使用していたものと考えられます。

藤原宮造営期の遺構としては、南北溝とその支線にあたりとみられる斜行溝のほか、資材運搬に用いられたと考えられる運河を確認しました。斜行溝は、南北溝と同時併存するとともに、運河を埋め立てた後の窪地と一体で埋められていることがわかりました。窪地の埋め立てに際しては、最終的に異なる土を交互に積み重ねて丁寧に整地がなされています。

藤原宮廃絶後の遺構としては、奈良時代から平安時代の掘立柱建物を6棟とそれにともなう塀、耕作にともなう小溝群を確認しました。掘立柱建物は多時期にわたっており、何度も建て替えられていることがわかりました。これらは、大極殿院や朝堂院で多数見つかった、奈良時代以降の建物と関係するものと思われます。また素掘りの小溝群との重複関係から、建物の造営と耕地化が繰り返されていたこともわかりました。

遺物としては、古墳時代から平安時代までの土器や、藤原宮期の瓦が多数出土しました。また遺構外からですが埴輪も1点出土しています。

以上のように、今回の調査によって、藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮廃絶後の土地利用の過程を知る重要な手がかりが得られました。



飛鳥藤原第186次調査区遺構平面図